

機関番号：11501

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2008～2010

課題番号：20520206

研究課題名（和文）：クルックシャンク研究 挿絵から見る英国ヴィクトリア朝の民衆社会

研究課題名（英語）：A Study of Cruikshank: Socio-Cultural Victorian England

Illustrated by Cruikshank

研究代表者

中村 隆（NAKAMURA TAKASHI）

山形大学・人文学部・教授

研究者番号：00207888

研究成果の概要（和文）：

A: 「クルックシャンクにおけるホガース模倣」

ポールソンの先行研究に異説を唱え、クルックシャンクはホガースに始まる英国の諷刺喜劇の図像的伝統に終焉をもたらした挿絵画家ではなく、ホガース的なエンブレム図像の正統な継承者の1人であるということを論証した。

B: 「クルックシャンクの連作版画『酒瓶』（*The Bottle*, 1847）の社会文化史的解明」

禁酒主義の思想を体現する『酒瓶』で用いられたのは「蝨刻電鋳版画」（glyphography）という版画媒体だった。精密さという点で銅版画よりも劣るこの方式をクルックシャンクが敢えて採用した理由は、安価な版画を直接労働者階級に届けるためである。労働者階級における飲酒の悪弊を根絶しようとした絶対禁酒主義者（teetotalist）としてのクルックシャンクの目論見がこの版画媒体を選択させたのである。

研究成果の概要（英文）：

A: Cruikshank's Imitation of Hogarth

My claim is that some of Cruikshank's illustrations for *Oliver* can be seen as signifiers, even if Paulson does not endorse this opinion. This is testified by figuring out the riddles embedded in the illustrations for *Oliver*. Cruikshank follows the lead of Hogarth, who made his prints all the more emblematic by proposing formidable riddles to the viewer of his plates.

B: Socio-Cultural Interpretation of Cruikshank's *The Bottle* (1847)

Though glyphography was inferior to chalcography (copper engraving) in terms of exactness and minuteness, the former was definitely superior in respect of the cost of prints. In creating *The Bottle*, Cruikshank utilized not chalcography but glyphography in view of propagating his teetotal prints directly to the working class, who were, in general, notorious for their addiction to alcohol.

## 交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2008年度	700,000	210,000	910,000
2009年度	500,000	150,000	650,000
2010年度	500,000	150,000	650,000
総計	1,700,000	510,000	2,210,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文学・英米・英語圏文学

キーワード：クルックシャンク、ホガース、挿絵、エンブレム、英国ヴィクトリア朝

### 1. 研究開始当初の背景

チャールズ・ディケンズの小説研究の中で、ディケンズの小説に付された挿絵に関する研究が比較的弱いのではないかと考えるようになった。言い換えると、挿絵を単なる添え物ではなく、挿絵を本文から独立させた「図像」として研究することの意義を見いだした。

ディケンズの『オリヴァー・トゥイスト』の挿絵画家として盛名を馳せたクルックシャンクの挿絵研究は未だ不十分と判断し、この分野を新しい研究テーマとして設定した。

### 2. 研究の目的

クルックシャンクの「挿絵」を、それぞれ一個の独立した版画作品として捉えることによって、以下の2つに取り組んだ。

(1) ホガース以来、連綿と連なる英国の「風俗画」と諷刺版画の系譜の中におけるクルックシャンクの位置を解明する。

(2) 挿絵の中に描かれた当時の様々な事物の持つ意味の解明を通して、英国ヴィクトリア朝の民衆社会が呈示する幾つかの「もの」の文化史について考察する。

### 3. 研究の方法

1830年代と1840年代のクルックシャンクの挿絵92点を分析の対象とし、挿絵1点ずつについて、先行研究を精査した。また、諷刺版画の伝統と英国ヴィクトリア朝の「もの」

という観点より、挿絵ごとに分析を施した。具体的には、以下の2点の方法による。

(1) 先行研究が豊富な挿絵グループについては、挿絵1点ごとの「定説」を洗い出し、見落とされている図像学的・文化史的な視点がないか、再検討を加えた。

(2) 先行研究が比較的少ない挿絵グループについては、特に重点的な画像分析を施し、図像学的視点と「もの」にまつわる文化史的な観点から考察を加えた。

### 4. 研究成果

研究成果を2つの観点で総括する。

(1) クルックシャンクはホガースに始まる英国の諷刺喜劇の図像的伝統に終焉をもたらした挿絵画家ではなく、ホガース的なエンブレム図像の正統な継承者の1人である。ポールソンの先行研究が指摘する通り、エンブレムとは、挿絵が図版として自己主張し、本文から独立して存在し、「意味を発信する」テキストである。『オリヴァー・トゥイスト』の2枚の挿絵にその具体例が示されている通り、クルックシャンクの少なくとも一部の挿絵は、本文の文脈とは異なる「意味を発信する」テキスト、すなわち、エンブレムである。

(2) 飲酒が、暴力、犯罪、狂気、破滅を引き起こす根源の契機となることを描いた『酒瓶』は、ホガースの『ジン横丁』を下敷きとしており、クルックシャンクの図像学の祖形にホガースがいることが再確認できる。労働者階級における飲酒の悪弊を根絶しようとした絶対禁酒主義者 (teetotalist) としてのクルックシャンクの目論見が「蠟刻電鍍版画」(glyphography) という版画媒体を彼に選択させた。また、屋内外の「もの」に注意深い眼差しを向ける『酒瓶』を見ると、クルックシャンクもまた「もの」によって「もの」の所有者の「経済状態」「階級」「価値観」「精神状態」などを語る物質象徴主義者の 1 人であったことが明らかになる。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 2 件)

中村隆、博士論文報告、ディケンズ・フェロウシップ日本支部年報、査読無( 招聘論文 )、第 33 号、2010、158-166

中村隆、クルックシャンクのたくらみ—『オリヴァー・トゥイスト』におけるホガース模倣、山形大学人文学部研究年報、査読有、第 7 号、2010、61-83

〔学会発表〕(計 1 件)

中村隆、博士論文報告、学会名：ディケンズ・フェロウシップ日本支部、大阪市立大学、2010 年 6 月 12 日

〔図書〕(計 0 件)

〔産業財産権〕

出願状況 (計 0 件)

名称：

発明者：

権利者：

種類：

番号：

出願年月日：

国内外の別：

取得状況 (計 0 件)

名称：

発明者：

権利者：

種類：

番号：

取得年月日：

国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

#### 6. 研究組織

##### (1) 研究代表者

中村 隆 (NAKAMURA TAKASHI)

山形大学・人文学部・教授

研究者番号：00207888

##### (2) 研究分担者

( )

研究者番号：

##### (3) 連携研究者

( )